慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アートと社会 : ケース・ スタディ:スタジオ食堂(脱芸術/脱資本主義 : 半プロダクション礼賛)
Sub Title	
Author	沼田, 美樹(Numata, Miki)
Publisher	
Publication year	1999
Jtitle	Booklet Vol.4, (1999.) ,p.42- 49
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000004-04211160

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アートと社会
ケース・スタディ：スタジオ食堂

沼 田 美 樹

スタジオ食堂
左手の白い建物が事務所およびギャラリー、右手がアトリエ

アートは日本においてどのような社会的機能を持ち得るのか。

個人から生産されたアートが、社会に出て公の目に触れるためのプロセスがあまりに限定されており、それによってアートが本来果たすべき機能が果たされていない。文化的歴史的文脈の中で研究され、展示されるか（美術館などによって）、あるいは商品として流通するか（ギャラリーなどによって）に偏りがちで、「同時代の人間同士のコミュニケーション」というアートの役割を果たすには十分ではない。日常の中で生産されているアートを、受け手である個人がリアルなものとして受容し、感じ、そこに提示されている何らかのもの——アーティストが生身の人間として感じ取った問題——を、再び自分の問題として反芻していくことは、社会におけるアートの重要な役割である。個人（＝アーティスト）

→社会（＝アートを公にする場）→個人（受け手としてアートに接する人）…という連鎖の中でこそ、アートは文化的歴史的価値を確実なものとしていくのである。しかし現在、その最初のプロセスである個人（＝アーティスト）と社会をつなぐべき媒体がうまく機能している例は少ない。

1980年代から1990年代にかけて、地方公共団体によるアーティスト招聘プロジェクトや滞在制作型のアーティスト・イン・レジデンス、オルタナティブ・スペース、古くなった建物を利用したサイト・スペシフィック展示など、さまざまな試みがなされている。新聞や一般誌にとりあげられたり、地元のテレビで放映されたりなど、反響が大きなプロジェクトも多いが、どれだけの観客が動いたかということは結果の一側面に過ぎず、ともするとアートに関わる人間の中だけの閉ざされた連鎖の繰り返しを促す危険性もある。

高度に資本主義経済が発達した日本社会の中では、経済効率が最優先される。本来は利潤追求を目的としないはずのアートが、社会を通じて個人に向けて機能するための新たな可能性として、どのような媒体が考えられるのか。

1990年代半ば、20代のアーティストが集まって共同のアトリエを構え、それがやがてアートと社会をつなぐ可能性を持つメディアとして、アーティストや美術関係者、企業、地方自治体に注目された。「スタジオ食堂」というわずか10数人で構成される活動グループである。公に向けた組織的活動は1998年をもって休止しているが、スタジオ食堂の活動によってさまざまな可能性と問題点が提示された。

アートと社会の関係を考えるためのケース・スタディとして、以下、「スタジオ食堂」の例を考えてみたい。

1．スタジオ食堂

スタジオ食堂は、1994年に5人のアーティストが集まって制作のための場所を共同で借りたことに始まる。その場所は始め、単なる共同アトリエとして使用されていたが、1997年、アートと社会のより多様なコミュニケーションを発展させるという目的のもとに、展示空間（ギャラリー）を作り、展覧会や講演会、あるいは近隣住民との懇親会などを催すようになった。1997年度の活動には、企業や団体からの助成を受け、また市や公共機関の協力を得て、11ヶ月の間に展覧会４本と講演会２本、その他に同じ敷地内にある企業や近隣住民のための催し物、スポンサー企業の社員見学会などを実行した。スタジオ食堂には、1998年12月の時点で、アトリエを持つアーティスト8名、その他の参加アーティスト3名、企画・運営スタッフ2名、他に、催事ごとにボランティアスタッフ15―20名が参加している。

設立当初のスタジオ食堂は、できるだけ広い場所をできるだけ安く使

いたい、というアーティストの現実的な目的から集まった集合体であったが、運営形態を整えるにつれて個人が集まることによって生まれる個人以上の力を認識しはじめ、社会との接点をより大きくしてコミュニケーション・メディアとしての役割を担うという目的のもとに、移転・改装後の1997年には、活動の内容を広げ、スタッフ構成をより組織的に構築した。アートから社会へ、また逆に社会からアートへの関心が次第に高まり、互いに接点を求めているという状況を理解した上で、双方の情報交換がより直接かつ柔軟に行われることを目的とした中立的な場所の必要性を、日々の活動の中で実感していたからである。

1980年代から1990年代にかけて、美術館やギャラリーなどの既存の施設のほかに、アート・プロデューサーやオルタナティブ・スペースなど、新しい役割を持つメディアがアート（アーティスト）と社会の間に媒体として介入していたが、それでもやはり、既存のシステム（例えば欧米からスタイルだけを輸入した展示の方法など）や、個々のアーティストおよび作品の流通という意識に捕らわれすぎ、社会におけるアートの役

スタジオ食堂組織図

割を真に意識するには不十分であったように思われる。個人を越えることでより個人に関与し、システムを組み替えることでよりシステマティックに機能する場、その試みとして、第二期スタジオ食堂の活動は始まったのである。

2．組織ー半組織

1）スタジオ食堂は、あくまでも個人の活動を基本としながら、場所を共有することによってある程度の組織的な活動をする流動的な共同体である。参加するアーティストは、基本的に独立したアーティストとしての活動を行っている。作品のコンセプトも制作プロセスもそれぞれ異なり、また作品流通のための経路も個々に独自のものを持っている。作品に対して意見したり議論したり、あるいは作業を助け合ったり、ということはあるが、グループとして作品を発表することも、共同制作で作品をつくることもほとんどない。つまりそこには芸術における「コラボレーション」的な発想はない。スタジオ食堂は現実の「場所」としての共有物であり、また情報の交換と共有の場ではあるが、過去の日本美術史上に存在したような思想や主義を共有する芸術団体ではない。「芸術は個人のもの」と認めることによってさらに公共性を強める、いわば脱芸術（史）的活動である。

2）スタジオ食堂は、営利を追求しない任意の団体である。経済的基盤はアーティストのアトリエ使用料とアトリエ外アーティストおよび企画運営スタッフの参加費、すなわち個人の出資に負うところが多く、そうした収入が割合として全体収入の約71%（1997年度）を占める。その他に同年度には企業4社と1団体からの助成を受けており、それが約24.5%、残りは、展覧会入場料や催し物の参加費（2.3%）と、各展覧会への公共機関と個人からの寄付金（2.2%）となっている。展覧会や催

し物によって得られた収益はすべて活動資金に充てられ、参加する個人に利益として還元されることはない。また、労働力に関してはボランティアがほとんどで、活動に興味を持つ個人のボランタリーな労働力によって支えられている。こうした活動に対しては公共機関も理解を示しており、展覧会やレクチャーなどの催し物には、立川市や関連国大使館などの公共機関からの協力・協賛が得られた。

主要な構成員は、前述の通りアーティストが11名と企画・運営スタッフが2名の合計13名で、その全員が出資者である。活動の方針と予定は、企画・運営スタッフが提案し、全員参加（原則）の定期的なミーティングによって最終的な合議がなされるが、非出資者が活動に関して発言権を有することはない。

以上の2点をあわせて考えると、スタジオ食堂という共同体は非思想的かつ非営利、つまり脱芸術（史）的・脱資本主義的な「半組織」の構造を持っているといえる。

3．（脱）芸術と（脱）資本主義の交差点としてのメディア

資本主義経済を基盤とする日本で、システム、資金、人材など、既存のあらゆる材料を使いながらどのような新しい可能性を実現できるか、スタジオ食堂が1年半あまりにわたって行ってきたことはその実験であったといえる。美術館やギャラリー、国同士の交流として開催される国際展など、資本主義システムや公共制度に則って発展してきたメディア以外に、アート（アーティスト）から社会に、また逆に社会からアート（アーティスト）に向けられるエネルギーの合流点にある新しいメディアの可能性としてスタジオ食堂を見てみると、（脱）資本主義と（脱）芸術が交差する仕組みが見えてくる。

個々のアーティストの活動そのものが生み出す「芸術」に、個人を越えた社会的意味を発見し、「アート」そのものが社会において果たすべき機能と役割を持たせること、また資本主義を俯瞰して、その中に存在するシステムを拾い出し、それらを組み替えることによってあらたな脱資本主義的構造を作ること、すなわち個人から個人以上の力を引き出し、組織ほどの拘束力を持たずして確固たる構造を構築すること、それがこの一見ゆるやかでつかみどころのない「半組織」の核たる方針であった。

こうした「半組織的」メディアの介在は、ファジーであると同時に極めて直接的にアートと社会の双方に関与する。だからこそ芸術から資本主義に向けられたベクトルと資本主義から芸術に向けられたベクトルに一つの解決法としての接点を提示できるのではないだろうか。

4．実験的運営から見いだされた問題点

以上、スタジオ食堂の概括と理念について述べてきたが、実際に運営するなかで、いくつか大きな問題があることを確認した。

スタジオ食堂の存在は、アートから社会へ、また社会からアートへと、双方向に有効に機能する。先にも述べたが、こうした存在はアートが社会において本来の機能を果たし、また社会がそれを受容してコミュニケーションを築くための触媒となる重要な役割を担っているのである。にもかかわらず、運営の存続は難しく、活動を一時休止せざるを得ない状況に至った問題点はどういうところにあるのか。

1）アーティストの職業意識

まず第一に、アートの生産者であるアーティストの認識が少しずつ変化していることにある。アートが社会性を持つということの意味そのものが、アートの機能という社会的問題から、個人の生活という個人的問題として理解される傾向が強いのである。アーティストを職業としてとらえ、作品が社会に出ること＝経済的価値をもって流通することを無意識のうちに（あるいは意識的か）、強く意識するアーティストが増えている。貨幣価値は本来、アートが順当に機能してこそ付随してくるべきものである。アートの価値として、社会的機能よりも経済的商品としての機能が先立つことによって、一個のモノとしての貨幣価値のみが重要視され、感覚や思考を触発する触媒としてのアートの機能は意識されにくくなる。

スタジオ食堂に参加するアーティストにとって、個人（アーティスト）が生産した作品が最終的に経済価値をもって社会に流通するために、生産の場であると同時に広報の場としてのスタジオ食堂は利用価値が高かった。本来の目的である「アートと社会の潤滑なコミュニケーションの場」という意識は、「社会性」と「経済性」の混乱によって表面的かつ個人的有用性に比重が傾いた。

2）公共（社会）からの過度の期待

スタジオ食堂の活動が美術関係者のみならず、企業や公共団体などから注目され、企業からの助成や公共団体からの協力を得られたことは、アートから社会へのアプローチの一つの成果であると同時に、社会からアートへのコミュニケーションの突破口としてスタジオ食堂が機能したということを示している。若いアーティストやこのような「半組織」的団体の平常の活動に対する助成は難しい、という既成概念を揺るがすものとなったことは大きな功績であり、経済効率を優先する資本主義経済におけるアートの可能性を広げたとも言える。しかしながら、そうした公からの注目によって、一つの矛盾が生まれていたことも現実なのである。

既存の概念とは異なる活動は、その新奇性と独自性において、研究団体の研究対象として、あるいは公共組織の実験的活動の協力者として有効であるため、研究への協力や公共団体との共同企画などの申請が絶えない。また美術関係者たちにとっても「アーティストにいつでも会える場所・いつも何かやっているところ」として、あるいは海外からの訪問

者に東京のアートを紹介する場所として、スタジオ訪問の申請が多々ある。活動の性質から考えるとそうした団体との共同作業や一種のサービス的活動も、果たすべき役割の一つである。しかし実際、ボランティア労働と個人の出資によって支えられている活動団体にとって、すべての期待に一度に答えることは極めて難しく、残念ながら断念せざるを得ないものも出てくる。自らが演じるべき役割を自覚し、次々と出てくる期待やあらゆる要求が重要であることは理解しながらも、活動の規模と経済的基盤を考慮すると不可能なのである。

任意の団体として社会的存在意義を追求しながら非営利的活動を行なっていたスタジオ食堂は、その存在価値をある程度認識されながらも、余暇的でボランタリーな活動の域を越えることはできなかった。資本主義的サービスとエンターテイメントを当たり前のように享受してきた日本の社会は、余暇活動やボランティアという、社会的存在価値は高いが営利は産まない性質の活動に対して、受容の態度を越えて積極的なサポートをすることには慣れていないというのが実状である。

5．今後のアート・シーンへの期待

現在、社会におけるアートの機能とその有用性は、美術関係者や研究

事務所およびギャラリーのある建物の内部

者、企業、公共団体などあらゆるジャンルの人々が認識し、研究や実験を試みている。そのなかで、実際にアートの現場に携わる人間がその意義に気づき、社会へと向かうメディアとして立ち上げたスタジオ食堂という「半組織」的活動は、アートにとって、また社会にとって、一つのサンプル提示であるとともに問題提起であった。既存のシステムを材料として利用しながら、新しいメディアの可能性を探るというスタジオ食堂の実験は、必ずしも成功はしなかったが、こうしたメディアの存在の重要性を少なくとも関係者に認識させることはできた。しかしながら、研究としての認識を実際のオペレーションに反映させるという段階で、社会の受け入れ体制が未成熟だったことは否めない。

スタジオ食堂が公に対する組織的活動をしばらく休止するというのは、社会の現状と照らし合わせると仕方のないことであるが、この実例から浮上した問題を、それぞれの関係者が実感として受け止めて分析し、その研究成果を生きた形で現実のものに還元するべく努めていくことが望まれる。

（ぬまた　みき・元スタジオ食堂プロデューサー）